研修医の声

異郷、されど故郷

厚生連柏崎総合医療センター
三　浦　雅　郁

信越本線に揺られながら、窓の外を見る。

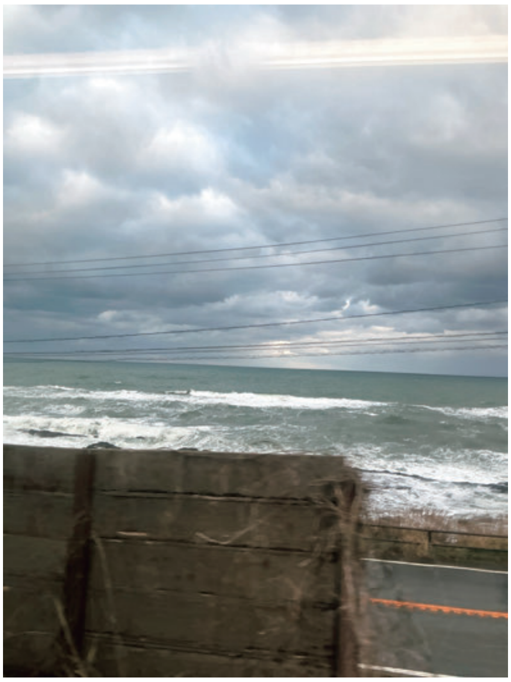
新潟の親不知を越えた荒波を見て、故郷とは全く違う景色に畏敬の念を抱いた。なるほど、海の顔すら違うものか、たかが６時間、されど６時間。

これが、医師としての第一歩を歩こうと、生まれて初めて一人暮らしをするために柏崎に向かった私の胸中である。

今年度より柏崎総合医療センターで初期研修医として働くことになった、三浦雅郁と申します。私の人生において、海とは穏やかなものであり、空は青いものでした。私が育ったのは、兵庫県西宮市。日本でも有数の、晴れが多く波穏やかな瀬戸内海地域の街です。また、同時に幼少期を福岡県大牟田市で過ごしており、こちらも晴れが多く波穏やかな有明海沿岸の街です。さらに、高校は京都の洛南高校、大学は瀬戸内沿いの神戸大学と淀川沿いの関西医科大学。大体、似たような気候の地域で人生が完結していました。なので、私の中で日本の街とは、海は穏やかで空は青く、そして平地を挟むように緩やかな山がある光景だったのです。

しかしながら、新潟に来ると全くがらりと違った景色が目に入りました。海は激しくうねり、風は海から激しく吹いて、空はうっすらと雲がかかり、山は峻険。西宮駅からサンダーバードと北陸新幹線、そしてしらゆきを乗り継いで６時間ほど。がらりと自然の顔は変わり、吸い込む空気すら味が違う。なんとも、凄いところに来たものだと身を引き締めた次第です。

実際、関西の瀬戸内地方と新潟は大きく文化が違いました。牛肉文化の関西と豚肉文化の新潟、パン食が盛んな関西と米食が盛んな新潟、うどん文化の関西とラーメン文化の新潟、電車社会の関西と車社会の新潟、加湿器が必須の関西と除湿器が必須の新潟、など、研修で医学を学ぶと同時に、異郷の文化になれる楽しみと苦労も同時に学ぶことができました。なんとなしに、関西で過ごしていては得られなかった経験を知ることができたことは、今後の自分の人生において貴重なものであると考えています。

さて、もうすぐ新潟に来て一年が過ぎます。自分自身の進路としては、産業医を中心として、地方創生と健康経営に携わりたいなと考えています。このような考えに至ったのは、新潟に来て多くのものを見たからです。新潟に来て、地域の医療の実情だけではなく、地域の政治や経済の実情、少子高齢化からくる人口減少の影響を強く受ける地方の現実、これらを見たことで自分の進む道を決めました。

人間、三浦雅郁の故郷は確かに関西です。しかしながら、医師、三浦雅郁の故郷は胸を張って新潟ということができます。新潟での初期研修、そしてイノベーター養成コースで学んだことは、私に蒙が啓かれた思いを感じさせた次第です。新潟で学んだことを活かして、知己、ひいてはこの国のために働ける医師になりたい所存でございます。